

平成 31 年漁期イカナゴシンコ(新子)漁況予報

平成 31 年 2 月 15 日
 兵庫県立農林水産技術総合センター
 水産技術センター

1. 産卵親魚の調査結果

播磨灘北東部の鹿の瀬で、12月3日から1月4日にかけて延5回、文鎮漕ぎによる採集調査を実施した。

(1) 親魚密度

文鎮漕ぎ 1 曳当たりの採集尾数は 4.9 尾で、平年値を下回り、昨年と同様低い値であった。年齢組成は 1 才魚が 20.6%、2 才魚以上が 79.4%であった (表 1)。

表1 親魚密度(文鎮漕ぎ1曳当たりの採集尾数)

年	1才魚	2才魚以上	全 体
今 年	1.0尾 (20.6%)	3.9尾 (79.4%)	4.9尾
昨 年	10.8尾 (94.6%)	0.6尾 (5.4%)	11.4尾
平 年	117.9尾 (86.6%)	18.3尾 (13.4%)	136.2尾

(平年:平成19~28年の10年間の平均値)

(2) 親魚の全長組成

親魚全体の平均全長は 135.1mm で、昨年の 108.9mm を上回った (図 1)。

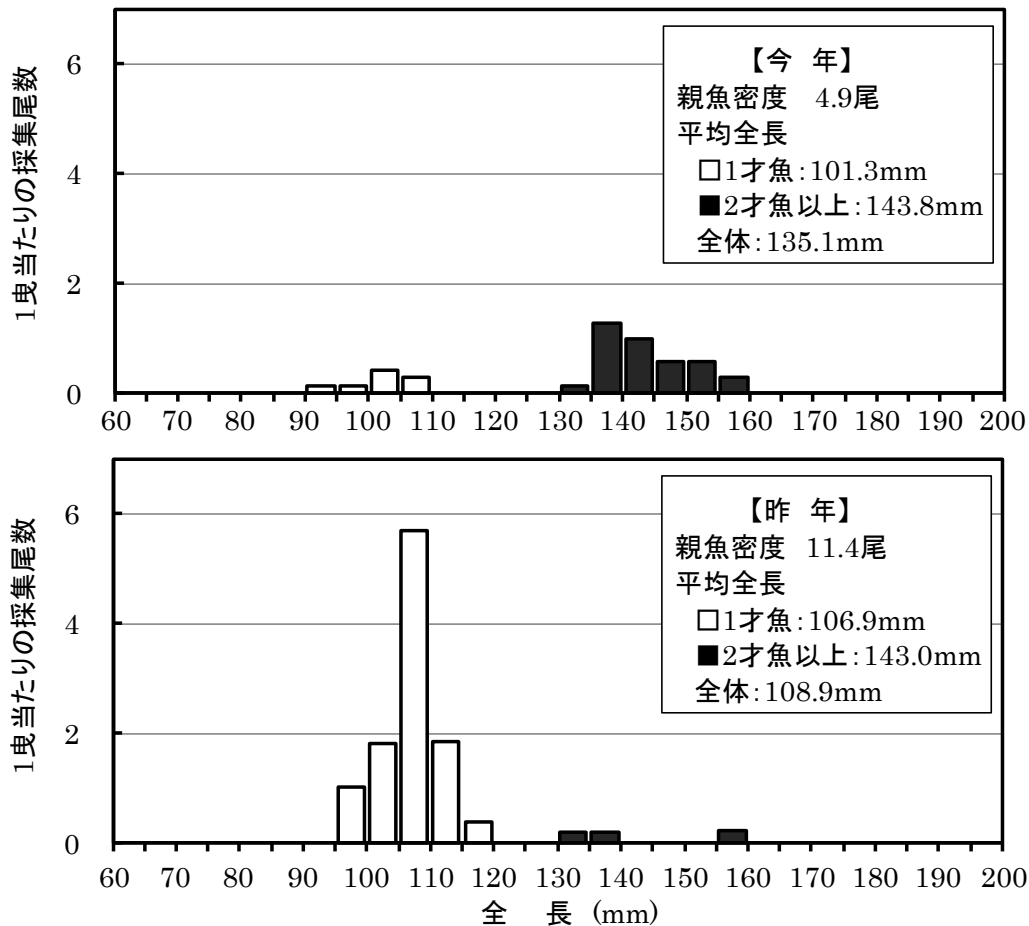


図 1 親魚の全長組成

(3) 産卵量指数

今年の産卵量指数は 0.17 で、昨年と同様低い値であった（表 2）。

*産卵量指数：総産卵量の目安となる数値。1尾当たりの産卵量は親魚の大きさによって異なるため、毎年の親魚密度と全長組成から算出しています。

表2 産卵量指数(昭和62年漁期の産卵量を1.00とした場合の相対値)

年	1才魚	2才魚以上	全体
今年	0.01 (5.9%)	0.16 (94.1%)	0.17
昨年	0.14 (82.4%)	0.03 (17.6%)	0.17
平年	1.21 (67.2%)	0.59 (32.8%)	1.80

(平年：平成19～28年の10年間の平均値)

(4) 産卵盛期

今年の雌親魚の生殖腺（卵巣）熟度指数は、12月26日から1月4日にかけて大きく減少した（図2）。また26日の調査ではまだ産卵が始まっていなかったが、4日の調査では採集した全ての親魚が産卵を終えていた。以上のことから、鹿の瀬における今年の産卵盛期は、昨年よりも1週間～10日遅いと考えられた。

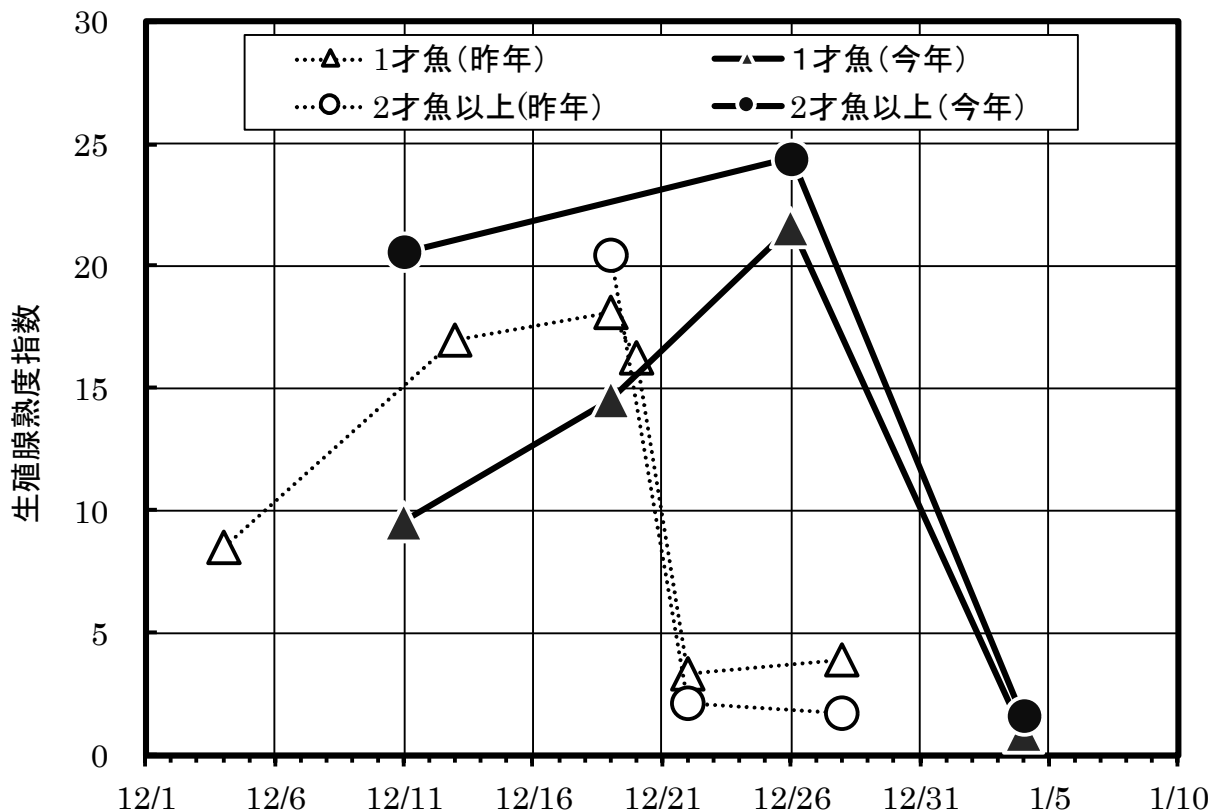


図2 雌親魚の生殖腺熟度指数の変化

2. 稚仔の調査結果

稚仔の調査は1月18日、21日、22日に実施し、表層から底層までの往復傾斜曳き（口径60cmのボンゴネット使用）により採集した。

1地点当たりの平均採集尾数は、播磨灘が1.9尾（昨年：1.2尾）、大阪湾が2.0尾（昨年：6.3尾）、紀伊水道が0尾（昨年：0.4尾）であった（表3）。播磨灘は昨年をやや上回ったものの、各海域とも分布量は低水準であった（図3）。

全長の平均値は、播磨灘が7.7mm（昨年9.0mm）、大阪湾が7.7mm（昨年9.9mm）で、昨年を下回る値であった（図4～6）。

表3 海域ごとの稚仔採集尾数（1地点当たりの平均値、単位：尾/m²）

海 域	今 年	昨 年	平 年
播 磨 灘	1.9	1.2	15.9
大 阪 湾	2.0	6.3	21.3
紀伊水道	0.0	0.4	4.7

*平年：ボンゴネットによる調査を開始した平成24年～29年の6年間の平均値

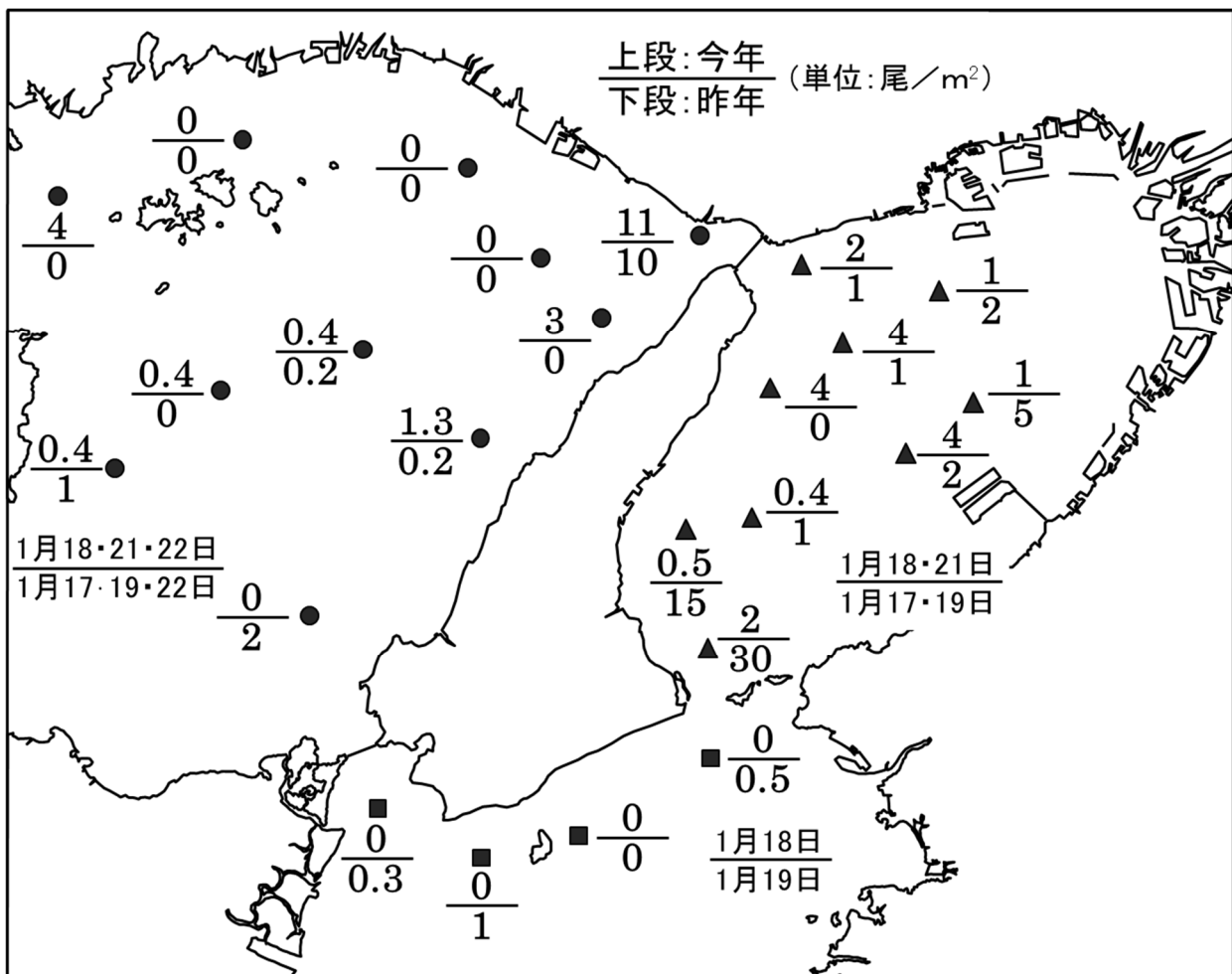


図3 稚仔の採集尾数

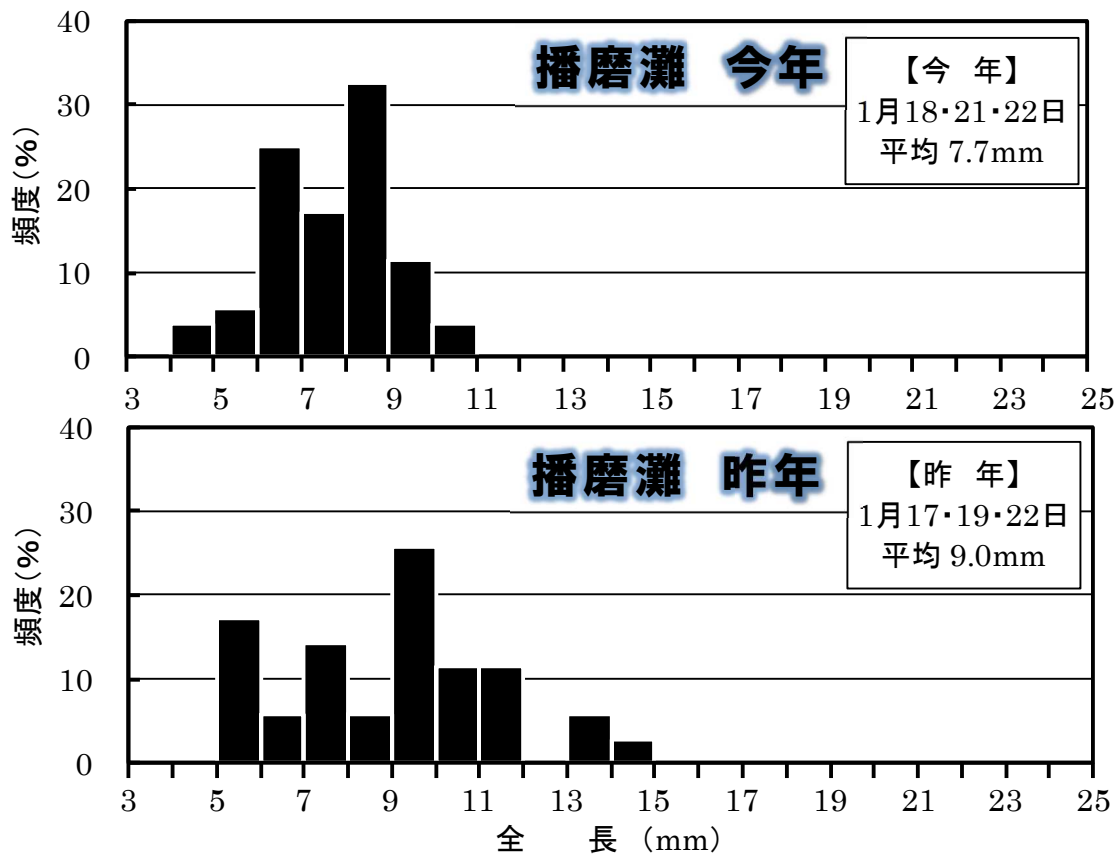


図4 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(播磨灘)

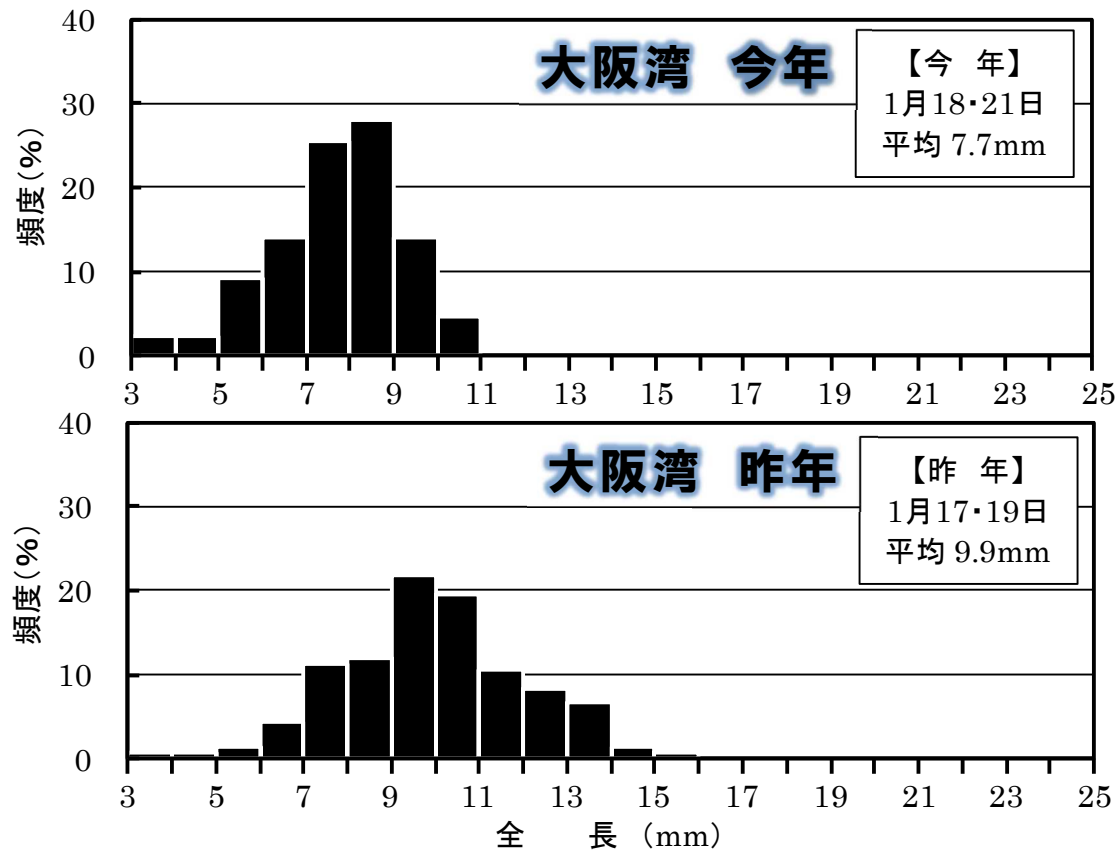


図5 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(大阪湾)

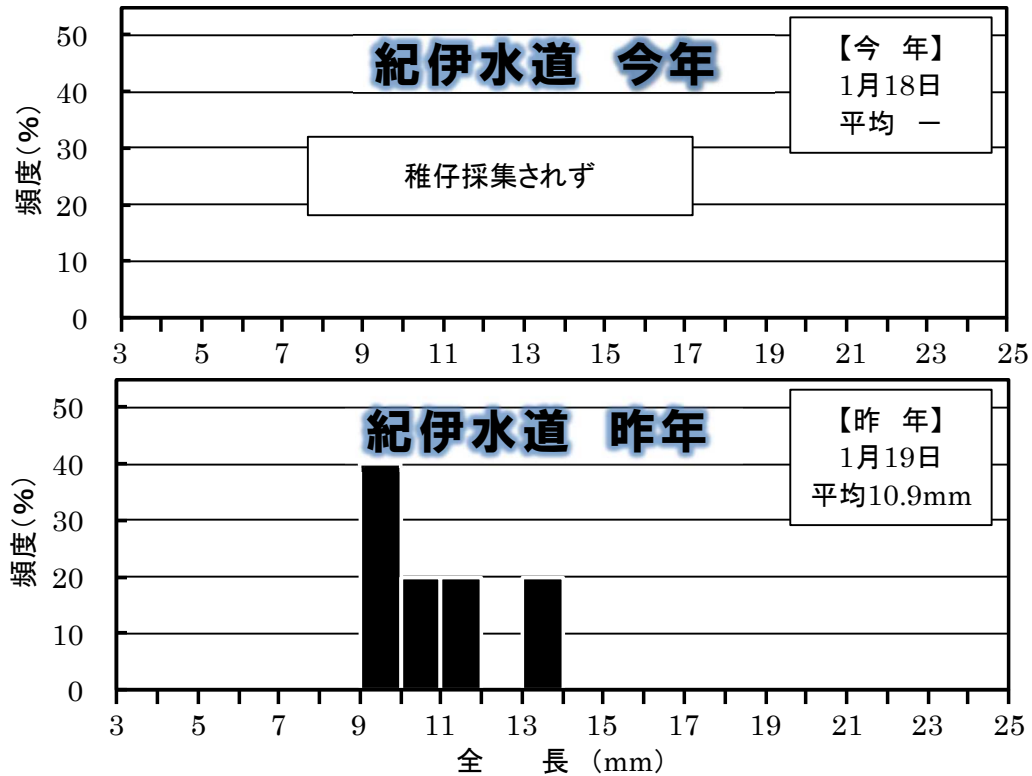


図6 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(紀伊水道)

3. 稚仔の成育の見通し

稚仔の成長速度は水温の影響を強く受け、水温が高いほど成長速度が速くなる。今年の明石海峡部の水温は、平年（平成20～29年の10年間の平均値）に比べて高めで推移している（図7）。

1月31日に大阪管区气象台から発表された平均気温の1か月予報（暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の平均気温は高い）から判断すると、今後の水温は平年より高めに推移すると予測され、稚魚の成長速度も平年をやや上回ると考えられる。

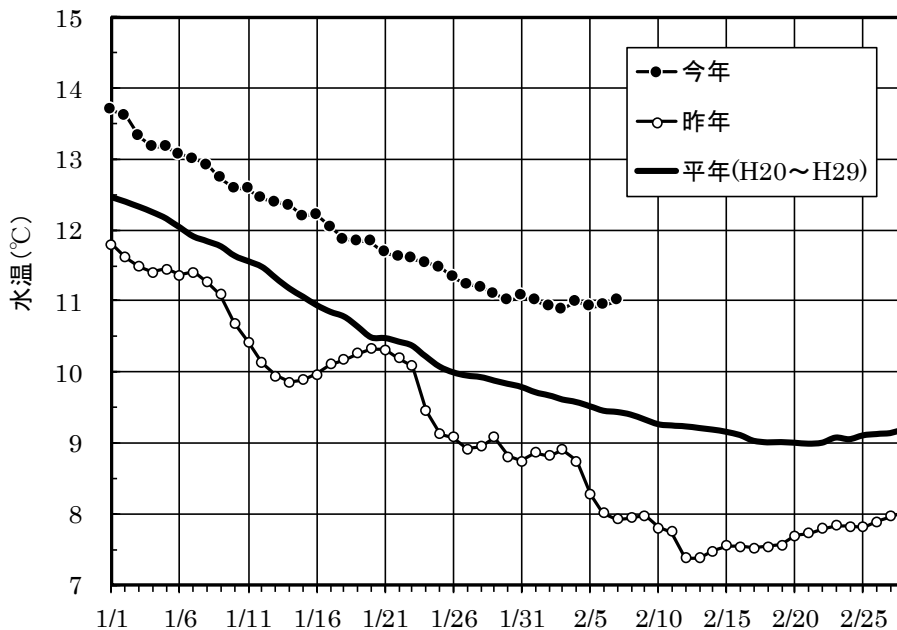


図7 明石海峡部1.5m層日平均水温の推移

4. シンコ漁の予測

昨漁期の漁獲量は、3 海域において平年（標本漁協における平成 20～29 年の 10 年間、2、3 月のシンコ漁獲量の平均値）を下回り、一昨年をやや上回った。

今漁期は昨年と同様、産卵量や稚仔の分布量が少ないことから、“今漁期のシンコ漁獲量は、大阪湾および紀伊水道では平年を下回り、昨年並み～やや下回る。播磨灘では、備讃瀬戸の稚仔の分布量が昨年よりも多かったことから、平年を下回り、昨年を上回る。”と予想される。

※) シンコの網おろし日は各地区漁業者の自主的判断によるが、過去の経験から網下ろしが早過ぎた場合には不漁になる可能性が高い。網おろし日の決定にあたってはこの点を十分に考慮する必要がある。

また、昨年に引き続きイカナゴの資源量が低水準であると予測されることから、昨年と同様、翌年の産卵親魚を残すことも考慮した漁獲や網あげの検討が必要である。